

## 25 「教える」と「学ぶ」の矛盾・葛藤（相剋性）は、社会全体で克服すべきこと?!

堂本 彰夫

(1) 「教育」と「学習」は表裏一体! しかも、相剋性あり?! 宿命的だが、その関係性を見極めなければ?!

先号(24)では、いわゆる「教育の目的」に関わって、現行教育基本法のそれを、私なりに再考してみた?! 要は、そこに示されている二つの側面(要素)、すなわち「個人的側面(要素)」と「社会的側面(要素)」を、無理やり分離・独立(対立?)させるだけでは何も生まないということ、改めて確認したということである! そして、新たな理想主義かもしれないが、それを、理論的に指し示すものが、繰り返し主張しているように、「生涯教育(学習)」の理念であり、そのためのしくみづくりだということである! 加えて、それを実現するための方略が、他ならぬ「教育協働」(学校教育と社会教育の合力づくり)だということである!

とにかく、現今の「教育の危機?」は、学校だけの、そして子ども達の教育だけの問題ではない! 言い換えれば、国民一人ひとりの、生涯に亘る(いつでも、どこでも、誰でも、何でも、どこからでも)学習の必要性と、それを振興・支援する社会全体の教育のしくみ(機能)のあり方の問題だということである! しかも、その「生涯教育(学習)の理念」は、実は、戦後の我が国の教育がもつ(他の国もそうであろうが?)、言わば「過去の軛くびき」から解放させるものでもある(った)ということである?! しかし、実際には、そこでは、「教育(教えること)」と「学習(学ぶこと)」の(関係の)矛盾・葛藤を露呈(先鋭化?)させてしまった! 否、結果的には、うやむやにされてきたということでもある! やはり、まだ終わっていないのである?!

すなわち、そこにあった(ある意味では必然でもあった?)、教育の目的の「個人的側面(要素)」と「社会的側面(要素)」を、それまでの反省から折角抽出・併記し、新たな民主国家としての歩みを始めたとは言えるが(→教育基本法)、そこにある(った)「教育(教えること)」と「学習(学ぶこと)」の(関係の)矛盾・葛藤の本質を克服することが出来なかった? 否、ある意味では、ギリギリの妥協という形でしか、それに対処することができなかったということであるが、その後の、様々な制度の導入、改革等に伴う係争事件、問題(論争)の発生は、そのことを如実に示している! 言うは易し、行うは難しということでもあるが、「教育」という営みというものは、本来的には、賛成と反対、迎合と批判の中で執り行われるものなのである(ある意味、人間の価値観や生き方のぶつかりあいであるからであるが、それが、「相剋性」ということでもある!)?!

しかし、だからと言って、単純な妥協や諦め(憔悴?)で終わるものでもない! 否、それは、絶対にあってはならない! しかるに、「教育」には、明るい未来はないのであろうか? 常に、相対立する両極のせめぎ合いの中で、もがき、苦しみながら、関係者は、その使命を全うしなければならないものなのだろうか? 私は、ある意味そうなのかもしれないとも思う?! 一人ひとりの価値観や生き様の違いは、それが、どんなに民主的な社会/国家であっても、生身の人間同士の出会い・ぶつかり合いの中で生じるものであるので、たとえ全教育関係者が、全身全霊をもって、それに対処しようとしても、それは、所詮無理難題でもあるのである?! こんなことを書くと、本当に頑張ってきた(いる)人を冒涇することにもなるが(実際に、頭を下げるしかないほど、その仕事に邁進している人も、多々いることは承知の上で!)、そのように思うということでもある!

(2) 「学習(学ぶこと)」と「教育(教えること)」! そこには必ず、矛盾・葛藤がある!

とは言え、一方で、ある意味矛盾した言い方であるが、そうした無理難題を、少しでも解決していくことは出来る! あるいは、偶然の出会い・関係の中で、想定以上の発見や喜び、それ以降の人生の糧となるようなものも得ることもある(教師と生徒の関係は、その典型であり、ある意味、学校には、そんなものが詰まっている?!)! 残念ながら、そうしたことが忘れられたり、それとは反対の事件や問題ばかりがクローズアップされたりもして、まるでそうしたことが、まったくなくなっているような印象操作もされているが(ただし、一部は事実かも?)、そのことは、絶対に忘れてはならない! 実際、未熟な人間関係やいじめ等によって「不登校」の子も増えているが、そして、それ自体は問題であるが、一方では、そうでない子ども達の方が、圧倒的に多いのである(もちろん、その中には、そうした可能性を内在化させている予備群?も、一定数はいようが?)!

とにかく、私は、そこに、「学習(学ぶこと)」と「教育(教えること)」、その双方の意味と正当な関係があると断言する(否、したい?)が(もちろん、それは、いわゆる「教科学習」だけのことではない!)、しかしながら、そうした良好な関係が、徐々に変質し、最早その臨界を迎えようとしているとも考えている! ちなみに、昨今よく耳にする「学校へ行かなくてもよい」というような言質は、実は、二つの意味合いがあり、一つは、「今通っている学校には行かなくてもよい」ということと、「他にも学ぶところがあるので、そこには行かなくてもよい」ということの二つである! 現状では、その双方が、残念ながら、同じ文脈で語られ、(復学への)学校関係者の必死な思いと行動とは裏腹に、その他の選択肢が、ますます正当化されつつもある(尤

も、緊急避難的な措置としては、それも仕方がないが!)?!そこが、気がかりと言え、気がかりなのである?!

だが、いずれにしても、子ども達の教育/学習においては、いわゆる「就学(義務)」ということがあり、どのような選択を行っても、ある期間は、何らかの学校には行かなくてはならない!それは、単に「義務」だからではなく、個々の成長・発達(「教育の目的」の二つの側面(要素)から得られる)には、それが必要なのである!ただし、それが、今通っている学校への、言わば強制的な復学には、必ずしも直結しない!だから、関係者のみなさん達(もちろん親御さん達も!)の思いやご苦労が目につくのであるが、同じ思いや苦労をするならば、これからは、新たな可能性を創り出していくことが必要である(事実、「施設の複合的整備」や「教育課程の工夫」等によって、これまでの限界・隘路を断ち切ろうとしているところもある!)?!

私は、すべてそれらは、「生涯教育(学習)」の視点、「教育協働」という手法の導入であると捉えているが、ここで言う「不登校」等の問題は、それによって、かなりの部分で緩和されるのではないかと考えてもいるのである!とは言え、どこであっても、そこには、「先生」と呼ばれる人の存在が、絶対に必要である!医者や弁護士も、まさに「先生」と呼ばれる人達であるが、彼らは、「先に生まれた人」ということではなく(笑)、「先を生きる人」ということであり、言うなれば、「相手の幸せを願って、将来を見通し、必要な対応/処置をしていくこと」に対する社会からの評価(感謝)が、そこには込められているということである?!ただし、そこには、必ず矛盾・葛藤がある!「学校の先生(教師)」の仕事も、まさにそうである!

### (3) 学ぶことだけでは遺漏や限界がある!そこに、教えること(支援・協力)の意義・必要性がある!

ということで、他にも、「先生」と呼ばれる人達がいるようであるが(例えば政治家?)、それは、その世界の人達が、限られた場・関係の中で、そう呼び合っているということでもある?!また、一方で、まったくの私的な関係(師弟関係)の中で、そのように呼ばれている人達もいる(芸能・芸術関係の世界が、そうである!)!まあ、それはそれでよいのであるが、問題は、ある意味その代表格?である学校の教師への、社会の側からの評価(眼差し)の変化(低下?)である!教科(指導)の専門性はともかく(こちらは、別のベクトルで危機に晒されている?→AIを始めとするICTの影響!),いわゆる生活(生徒)指導の専門性への疑義(不信感)が募っているということである(多くは、過重負担の為せる業なのであるが?)?!

ただし、ここで押さえておく必要があるのは、「教える」ということは、誰かが、何かを、直接(一方的に)行うということだけではない!必要なことと思われるものを学ぶ機会や場を、可能な限り臨機応変に構築することでもある!しかも、それは、特定の人が、すべて独りで行うということでもない!例えば、社会教育の世界でよく言われる「コーディネート」や「ファシリテート」の機能(役割)であるが、結果的に、誰かが学ぶ(気づく、意欲が沸く、仲間ができる等を含む)ことが出来れば、それが、「教える」ということにもなるということである!「学ぶ-教える」関係を、広く捉える必要があるということである!

実は、これが大切なのである!そこに、明確なカリキュラムがあろうとなかろうと、必要と思われる学習成果が出来れば(そこに、本人の自由意志やニーズが重なれば、さらによいが!),それでよいのである!裏を返せば、単なる(でもないかもしれないが?)学習者の意思や自己選択だけでは、遺漏や限界(→無駄や徒労とも?)が生じるということでもある!しかるに、そこに、例えば一時期脚光を浴びた?「状況に埋め込まれた学習-正統的周辺参加」(J. レイヴ&E. ウェンガー)や「潜在的カリキュラム hidden curriculum」(P. W. ジャクソン)、あるいは「意味ある他者 significant others」(J.S. ミード)、さらには「発達の最近接領域」(L. S. ヴィゴツキー)というようなものを加えれば、新たな可能性というものも見えてくる?!

それらは、教育する側が意図する、しないに関わらず、(学校)生活を営むなかで、児童生徒(学習者)自らが学びとっていくものがあるということを示唆しているが、また、そこに、「啐啄同時」(雛が卵から孵えようと殻をつついて音をたてた時、それを聞きつけた親鳥がすかさず外からついばんで殻を破る手助けをする→学ぶ者と指導者の呼吸がぴったり合うこと!)という視点を加えれば、まさに、子ども達の学習においては、それが貴重だということも分かる(だから、「先生」が必要なのである!)!しかし、それらは、明らかに、子ども達の、そして、学校教育のそれだけではない?!生きている人間の、生活のすべてにおいて妥当するのである!

そのことの気づきと対応が改めて必要なのであるが、それは、基本的には、「場」や「関係性」あつての話である!しかも、その「場」や「関係性」は、他ならぬ地域(コミュニティ)を土台にしている(もちろん家庭は、その構成者であり、出発点でもある!)!だが、学校は、その一部なのであるが、現在、そのような「先生」と「生徒」の関係は、甚だしく閉鎖的・限定的となっており、「先生」達の「苦労」や「やりがい」も、ほとんどその中に埋没させられている?!だから、それも含めて、新たな「学ぶ-教える」関係の構築と、それを実現させる方略が必要となってくるのである!当然、それは、子ども達のそれだけではなく、大人達の「学ぶ-教える」関係の再構築(「ひとつくりとまひとつくりの循環」ということでもある!要は、「学ぶこと」と「教えること」の矛盾・葛藤(相剋性)は、社会全体で克服すべきだということである?! (つづく)